

農村改革の牧師、J. F. オーバリーンとアルザス

八 亀 徳 也

序

1826年6月7日、アルザス＝シュタインタールの牧師オーバリーンの死後6日目に、マリー・ジャンヌ・シャイデッカーなる一信者が次のような追悼文を書いている。

あのお方は、数々の偉大な人徳的行為を実践なさる中で、生涯の一瞬をもなおざりになさいませんでした。その一瞬一瞬をあの方は、自分を信頼する者たちの身と心の幸せのために使われたのです（中略）そうです、誰からも愛された大切な牧師様、あなたは永遠に私たちの心の中に生き続けられるでしょう。私たちの子供や孫は、あなたが知識と愛によってどんなに偉大なことを完成されたかを、子々孫々に伝えて行くことでしょう。あなたに育てて頂く幸せを得た者は皆、あなたの死後もずっと感謝し続けるでしょう¹⁾。

この讃辞自体は何ら特別なものでもなく、またこのような惜別の辞は、古今東西、どんな高德の僧が亡くなったときでも読まれるものである。しかし、我々が扱うオーバリーンという聖職者は、59年間もの在任中、その多才ぶりと積極性と

1) Psczolla, Erich: *Aus dem Leben des Steintalpfarrers Oberlin. Von der Wirkung der biblischen Botschaft in der Wirklichkeit unserer Welt.* Lahr-Dinglingen: Verlag der St.-Johannis-Druckerei C. Schweickhardt 1987, S.8f.

神への絶対的な信仰心により、本来の司牧としての仕事以外に、実に驚くべきほど多くの分野に関心を示し、また実績を上げる一方、アルザス地方の狭くて不毛の山間部での、村と村民に対する、あらゆる生活面における無私無欲の献身により、間もなくヨーロッパ中のみならずアメリカでも有名になった人物である。本稿において私は、とくに彼の、任地シュタインタール（仏語＝バン・ド・ラ・ロシュ）での農村改革の仕事と、独仏二つの文化が激しくせめぎ合う、アルザスという特殊な土地での苦労とに焦点を絞って論考を進めていきたいと思う。

1

ヨーハン・フリードリヒ・オーバリー（仏語＝ジャン・フレデリク・オベルラン）は、1740年8月31日、当時フランス領であったアルザスの中心都市、ストラスブルに生まれた。この1740年という年には、プロイセン国王ヴィルヘルムⅠ世の後を継いだ息子のフリードリヒⅡ世、いわゆるフリードリヒ大王が国王の座に就き、オーストリアのマリア・テレサ（マリーア・テレジア）が、ポヘミアおよびハンガリーの女王ならびにオーストリアの大公妃となり²⁾、前者とともに長期政権の端緒を開く。ちなみに日本では八代将軍吉宗の時代で、一橋の徳川家が認められ、「青木昆陽が幕命で関東・東海地方に古文書を採訪」し、大阪高津に銭座が新設された年である³⁾。ところでオーバリーの父は、ストラスブルのプロテスタントのギムナジウム（高等学校）の教授、母親はストラスブル大学法学部教授の娘であった。オーバリー自身もプロテスタント系ギムナジウムで学び、卒業後、15歳から21歳まで、すなわち1755年から61年までストラスブル大学で神学を研究する。62年から65年までの3年間は、町の内科および外科医のダーニエル・ゴットリーブ・ツィーゲンハーゲンの家で、4人の子供の教育係、つまり住み込みの家庭教師を務めるが、この間ツィーゲンハーゲン博士

2) 1745年からは女帝。

3) 歴史学研究会『日本史年表』、岩波書店、1987年、183ページ。

から医学の知識と治療の手ほどきを受けたことも、後年、シュタインタールでの仕事に役立つ結果となる。

1763年に哲学博士号を取得し、65年に家庭教師の任期が切れると、再び大学に戻って進学の研究を続けるが、1767年4月1日、26歳と7か月で、前任牧師ヨーハン・ゲオルク・シュトゥーバーの後任として、シュタインタール担当の牧師に任命され、ヴァルダースバハ（もしくはヴァルトバハ）の牧師館に入り、以後59年間の長きに亘り、ここの教区および教区民を導いて行くことになる。在任中の特筆すべき、あるいは意外と思われる出来事を三つ、あらかじめここで挙げておきたいと思う。一つは、在職7年目の1774年に、オーバリーに対し、アメリカ合衆国の、当時イギリスの植民地であったジョージア州のEbenezer（エバニーザー）で布教活動をしないか、という非公式の打診がなされたことである。彼は北米に渡る意欲はあったが、独立戦争が起きたためにそれを断念した。次はフランス革命の時期に起きた事件である。革命政府による恐怖政治は、聖職者迫害という形でも現れ、その余波は次第にアルザスにも及んで来る。1794年7月28日、オーバリーは同僚の牧師とともに逮捕され、ヴォージュ山脈を越えて、山脈東側の町セレストまで連行され、軟禁状態の中で尋問を受ける。しかし、二人の毅然たる態度と、シュタインタールの代表者たちの嘆願書とが効果を發揮して、二人は数日後釈放される。三つ目は、齢もいよいよ80歳になんなんとする1819年、ルイ18世からレジオン・ド・ヌール勲章を授与されたことである。狭小な山岳地域における長年の顕著な社会貢献が、晩年に至って遂に国家による顕彰を得たという訳である。

2

シュタインタールにおけるオーバリーの、半世紀以上の長きに亘る仕事を概観すると、教区民・村民の魂の救済という牧師としての仕事以外に、幼児教育の創始者と農村改革者という二つの側面が大きく浮かび上がってくる。聖職者の務

めは当然のことである故に除外するとして、ここでは、本論の主題である農村改革の業績に進む前に、彼の幼児教育の領域での貢献について簡単に触れておきたい。

オーバリーンの幼児教育は、1770年にヴァルダースバハ、ベルモン、ベルフォスの三つの村に置いた「編み物学校」から始まる。これは、前年にベルモン村の、サラ・バンゼ（Sara Banzet）という24歳の百姓家の娘が自宅に作った編み物教室にヒントを得て設置されたものであるが、この「編み物学校」は、フリードリヒ・フレーベル（Friedrich Fröbel, 1782-1852）が、3、4歳から公共学校就学年齢までの幼児を集めた本格的な幼児学校として、1839年から40年にかけて、ドイツ・テューリンゲンのブランケンブルク（Blankenburg）に創設した最初の幼稚園（Kindergarten）よりもさらに70年も早い、ということになる。

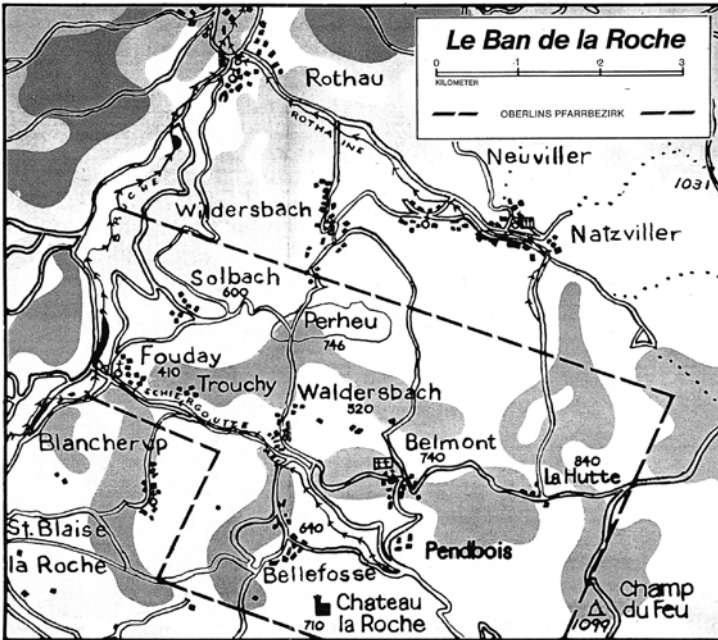
彼はまた、学校教育のために子供用のゲームや実験道具を考案し、地図や白地図を手製の印刷機で印刷し、さらには授業に手品を取り入れ、これを同僚にも勧めた。また野外学習にも重点を置き、「教室での授業は、とくに小さい子供たちの場合、植物と昆虫、岩と岩石と土壌の採集のための遠出によって補われた」⁴⁾ということである。このことから、彼が、子供が幼い頃より自分の住む土地を自然に学んでいくことに十分配慮していたと考えられる。オーバリーンはまた、出席の良好な子供には報奨金を与えるという、一種の奨学金のような方法も始めている。要するに彼の教育の基本は、「理論的であるよりは、実践的であった。問題へのアプローチは、思索的であるよりは直観的であったし、その解決方法は、演繹的であるより帰納的であった。」⁵⁾

4) ジョン・W. カーツ（柳原鐵太郎訳）『ジャン＝フレデリック・オベリン、アルザスの土を耕し心を育んだ生涯』、桜美林学園、2006年、100ページ。

5) カーツ、103ページ。

3

さて、牧師オーバリーンがその在任中に果たした社会貢献の仕事のうちで最も輝かしいのが、すでに上で述べた、山村シュタインタルでの農村改革である。とくにこの地域がもともとフランスでも指折りの寒冷地帯⁶⁾、土地が痩せてい



オーバリーン在任時代のシュタインタル：破線内がオーバリーンの担当教区。西側の一部、矢印のついた曲線が自然の境界であるプリューシュ川。

(aus: John. W. Kurtz: *Johann Friedrich Oberlin. Sein Leben und Wirken.* 2. Auflage. Metzingen / Württ.: Ernst Franz-Verlag 1988, Vorsatz)

6) アルザス＝コルマルール在の詩人 G. K. プフェッフェル (1736-1809) は、友人 J. ザラズィンに宛てた手紙の中で、シュタインタルのことを“アルザスのシベリア”と形容している。s. Dedner, Burghard / Gersch, Hubert / Martin, Ariane (Hrsg.): *➤Lenzens Verrückung◀, Chronik und Dokumente zu J. M. R. Lenz von Herbst 1777 bis Frühjahr 1778.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag 1999, S.143. (以下 Dedner u. a.)

る上に耕地面積が少ない山岳地帯で、村民の生活が恵まれていなかったために改革が必要とされた。前任の牧師シュトゥーバーは、ある程度その下地を作っていたが⁷⁾、この事業を飛躍的に拡大し、農業技術の改良と指導、産業・生業の育成、社会福祉の改善等々で尽力したのがオーバリーンである。本来都会育ちの彼がこのような山村での仕事に取り組めたのも、子供の頃、母方の祖父がストラスプールの郊外、シルティヒハイム (Schiltigheim) に買っていた農場ですでに農業の知識を得ていたからだ、と言われて⁸⁾。

彼は先ず道路や橋などのインフラストラクチャーの整備に着手する。着任当時、ストラスプールからシルメックまでは街道があったが、そこから先の、ブリューシュ川に沿った道は馬車が通れないどころか、人の往来さえ危険な隘路であり悪路であった。この道の拡幅工事には、珍しいことに当時すでにダイナマイトが使用されている。この道からブリューシュ川を渡ってシュタインタール地区へ出るための橋も整備されておらず、オーバリーンは地元の木材を使って新しい橋を架けさせた。かれはまた、フデーからヴァルダースバハに至る道路の工事では、自らつるはしとシャベルを担いで仕事を率先したこともある。

農業の分野における彼の改革の努力と工夫、あるいは指導は非常に多岐に亘っている。彼自身、牧師館の隣の土地で野菜作りをしたり、雨水を利用した液体肥料、堆肥、腐植土などを作る試みをしたが、村人たちには、下肥のためにトイレを作ることを薦めている。また穀類や他の作物、とくにジャガイモの品種改良にも努め、リンゴ、ナシ、サクランボなどの果樹栽培にも手を染め、さらに植物学への関心から、ブナの実から油、野イチゴとビャクシンからワイン、ニワトコの実からブランデーを作る方法も指導した。他方、牛をより効果的に飼育するために牧草の研究をし、従来のイガマメではなく、ポーランドから輸入した種で育てたウマゴヤシを与えることを村民に推奨している。酪農の分野では、さらにこれ

7) Dedner u. a., S.143; Psczolla, S.21; A. F. ベアード (栗原陽太郎訳) 『農村傳道の開拓者 オバリーン傳』、教文館、1930年、23ページ以下参照。

8) Psczolla, S.15f.

から進んで、余剰のミルクからバターを生産をするよう促し、牛の掛け合わせも工夫したばかりでなく、住民の犬の飼い過ぎに警告を出すなど獣医としての仕事にまで踏み込んだ。

上述の様々な農作業に必要な農機具が壊れた場合には、これを修理することにもオーバリーンは腐心したが、単にこれだけにとどまらず、村人たちの日常生活に必要な職人を養成することも考え、将来性のある若者を然るべき他村へ派遣し学ばせる、という方法も採った。一種の留学制度と呼べよう。この結果、「2, 3年経つと、村人たちの中には、鍛冶屋、車大工、大工、レンガ職人、建具屋、靴屋、屋根葺き、ガラス工などになる者も出て来た。」⁹⁾

医療の心得のあったオーバリーンは、医者としてのみならず、薬剤師としての仕事もこなしたし、また公衆衛生の観点から、村民たちに清潔さを心がけた生活方法を助言し、予防医学のためにはとくに種痘の予防接種を義務づけた。さらに産婦と新生児を保護する意味で、それまでと違って、産後の母親にはすぐには働かせないようにした。

これら以外にオーバリーンは、村人を借金苦から解放するために貸付金制度を創設したり、巡回図書館用に自費で図書を購入したりしているが、シュタイントールにおける彼の農村改革の活動はまだまだ枚挙に暇がない。

以上は、オーバリーンがシュタイントールのために働いた諸領域であるが、そのほかに彼自身の関心事として、当時ヨーロッパで行われていた軽気球の実験についての報道、メスマーの動物磁力の理論、骨相学ないし人相学、占い・予兆・超能力・夢遊病・幽霊のような超自然現象、ドイツの神秘主義などの分野もあった。このような関心ないし研究領域の広大さは、彼とほぼ同時代人で、本来の詩作以外に、精神科学から自然科学まで非常に広範な研究に携わっていたドイツ詩人、ゲーテを彷彿とさせる。

9) カーツ、133ページ。

オーバリーンが生まれ育ち、そして86年近くの長い生涯を送ったアルザスという土地は、よく知られているように、歴史的に極めて波乱に満ちた道を辿って来た。

この地域には古代、ケルト人が居住していたが、紀元前1世紀にゲルマン人が侵略し、その後ローマ人が支配する。紀元後5世紀からは、ゲルマン民族大移動によりアレマン人が定住する。のちにフランク王国に属してからは、長らく神聖ローマ帝国の支配下に入る。1648年、三十年戦争が終結するとフランス王国に組み込まれるが、1871年、普仏戦争の結果、ドイツ帝国に編入させられ、1918年、第一次世界大戦が終わると再びフランスに帰属し、1939年に第二次世界大戦が勃発したあと、1940年から45年まで又もやドイツに支配され、戦争後1945年からは再々度フランス領になって今日に至っている。このように、近世以降のアルザスの歴史は、まさに二つの大国の間で翻弄されてきたと言える。そして結局、一度も独立国家になり得なかった。ヨーロッパには、一民族が一国家を樹立できない地域がいくらかもあるが、このアルザスと興味深い対照をなすのが北ヨーロッパのバルト三国である。ここは中世以来、スウェーデン人、ドイツ人、ロシア人に次々と隷属させられ、時にはポーランド人の支配も受け、最終的にソ連邦の崩壊とともに、1991年にそれぞれ小国のエストニア、ラトヴィア、リトアニアが揃って再度の独立を果たした。

一つの祖国を持たないことは、人間のアイデンティティの意識に深い影を落とす。

アルザスのオベルネ出身の表現主義作家ルネ・シッケレ（1883-1940）は、「永遠のアルザス」というエッセーの中で、アルザス人の帰属意識について、「アルザス人自身も、自分たちは一体どこに属しているのか、ドイツにかフランスにか、それともそのどちらでもないのか、という問いに昔から取り組んできた」と書い

ている¹⁰⁾。また、アルザス人の言語、アルザスの特質を以下のように描いている。

アルザス人たちの言語はアレマン語で、彼らの文学はドイツ語のそれであり、伝説と慣習を、アルザスは他のドイツの地域と共有している（中略）というのは、私のもくろみは、次のことを明らかにすることだからである。すなわち、初めから独特のアルザスというものがあつたのであつて、決して完全にフランス的なアルザス、完全にドイツ的なアルザスというものはなかつた¹¹⁾。

今から200年以上も前にアルザスに生きたオーバリーンも同じような問題意識を持っていた。ヨーロッパ人にとって、いわゆるバイリンガルの状態はごく日常的な現象であるが、アンビヴァレントな感情はやはり拭いきれないようである。

彼（オーバリーン＝筆者）の母語はドイツ語であつたが、すでに子供のときにフランス語を学んだ。彼は教師として、主にフランス語をしゃべる教区で、いつもこの言語にいささかの不便さを感じていたと言われている。80歳になつたとき、彼は生涯を振り返つてこのように書いた、「私はドイツ人であるが、同時にフランス人である」と¹²⁾。

この引用にあるように、オーバリーンの担当教区であるシュタインタール¹³⁾では、周辺他教区にドイツ系の人々が住んでいたのに対し、フランス語が主流

10) Schickele, René: *Werke in drei Bänden*. Köln/Berlin: Verlag Kiepenheuer & Witsch 1959, Dritter Band, S.589.

11) Schickele, S.590f.

12) Psczolla, S.16.

13) この教区には、Fouday(独 Urbach), Belmond(Schönberg), Bellefosse(Schönfuß), Solbachの4つの村と、La Hutte, Pendbois, Trouchiの3つの小村とが属していた。すでにこれらの地名にドイツ語とフランス語の混在が認められる。

であったために、学校ではフランス語中心の授業が行われ、また教会の礼拝は、「ベルモン村では時々ドイツ語で行われ、他の教会ではすべてフランス語でなされた」とされる¹⁴⁾。下の表は、ヴァルダースバハ教区内の学校の、8年生のものと思われる授業時間割であるが、いかにフランス語に重点が置かれているかが明白である。

月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
1) 算数	1) 算数	1) 算数	1) 算数	1) 算数	1) ドイツ語読本およびフランス語への翻訳
2) フランス語 文法	2) 道徳的訓話 についての 作文	2) フランス語 読本および 段落の解釈	2) フランス語 文法	2) フランス語 読本	2) 文法
3) フランス語 読本	3) フランス語 文法	3) 書き取り、 および解釈 の訂正	3) ドイツ文の 書き取り	3) 文法解釈	3) 楽譜と唱歌
4) 地理	4) フランス語 読本	4) 教理問答す なわち児童 問答教義	4) 楽譜と唱歌	4) 地理	4) 児童問答教 義

(aus: Erich Psczolla: *Aus dem Leben des Steintalpfarrers Oberlin*, S.52)

宗教的にも、この地方は複雑な様相を呈し、シュタインタールは「カトリックの大海の中のプロテスタントの孤島だった」¹⁵⁾が、ルター派のプロテスタントで、自分にも他人にも清教徒的厳しさを有していたオーバーリン自身は、カトリックの信者や神父に理解を持ち、ユダヤ人にさえ寛容であり、また自ら執り行うミサに関しても、次のような例外的に寛大な態度を取ったと言われている。

1. 時々ミサの間に休憩をさせ、男の信者に自分の嗅ぎタバコを勧めた。
2. 悪天候が続いたあとはミサを取りやめ、教区民に、畑へ出て収穫作業をするよう促した。

14) カーツ、160ページ。

15) カーツ、146ページ。

3. 安息日の日曜日でも、貧しい者、未亡人やみなしごのために働くことを認めめた¹⁶⁾。

5

ここにひとつの、オーバリーンの身に起きた、ドイツ文学史上のちのちまで大きな意味を持つことになる出来事がある。

オーバリーンが37歳の1778年1月20日夕刻、疾風怒濤時代を代表する一人のドイツ詩人が彼を訪ねて来る。名をヤーコプ・ミヒヤエル・ラインホルト・レンツと言い、市民劇『家庭教師』(1774)の作者としてすでにドイツ中に知られていて、オーバリーンもこの作品を読んでいた。レンツが牧師の許を訪ねたのは友人たちの勧めによるが、恐らくは社会問題・社会改革に強い関心を抱いていた彼自身の動機も十分に考えられる¹⁷⁾。オーバリーンは、この突然の来訪以来起きた様々な事件を綴った手記を、次のような言葉で始めている。

1778年1月20日、彼は当地へやって来た。私は彼を識らなかった。最初見たとき、髪と垂れ下った巻き毛から推して、家具職人と思った。がすぐに、彼の率直な態度で、私が髪の色に惑わされていたことが分かった。「ようこそ

16) Psczolla, S.63.

17) レンツが一体どのルートを通してオーバリーンの許に至ったかについて定説はないが、彼が世話になったシュロッサー家のあるエメンディングエンを出発したあとライン河を渡り、セレスタを経てヴォージュ山脈に入り、シャルボニエール峠を越えてヴァルダースバハに到達した、という考えが有力である。と言うのは、エメンディングエンのシュロッサーがバーゼルのザラズィン宛てに1778年1月21日に書いた手紙の欄外に「レンツは当地にいました」と記してあり、レンツのヴァルダースバハ到着6日後の1778年1月26日に、今度はオーバリーンが、恐らくは逆コースで、ヴォージュ山地を越えてバ・ラン（下ライン）県のセレスタ、マルコルスハイムを経由し、ライン河の向こうのケンドリゲンやエメンディングエンに達する旅行をしているからである。これら以外の事情も加味して考えると、兩人ともストラスブールまで出て、大きく迂回したと想定するのは困難である。vgl. Dedner u. a., S.130ff.

いらっしゃい、まだ初対面ですが。」—「私はK氏の友人でして、あの人からよろしくとのことですよ。」

—「お名前は？もしよろしければ。」—「レンツです。」—「ははん、おたくの作品は出てなかったかな。」（私は、この名前の人の作とされたいくつかのドラマを読んだことを思い出したのである。）彼は答えた、「ええ、出ています。でも、それらによって私をご判断なさらないで下さい。」

我々はお互いに会話を楽しんだ。彼は私たちに、ロシア人やリーフランド人の様々な服装を描いて見せた。我々は彼らの生活様式などについて話をした。私たちは彼を校舎の中の面会室に泊めた¹⁸⁾。

このように、二人の出会いは友好的な雰囲気ではじめたが、ゲーテが大臣を務めていたヴァイマル公国を2年前に追放されて以来、南西ドイツとスイスをさ迷って、すでに統合失調症（精神分裂病）の発作を起こしていたレンツは、到着の日の夜更け、宿としてあてがわれた学校の校舎前の石の水槽に飛び込み、水浴びをする。彼は以前、ケーニッヒスベルク大学で神学を学んでおり、一度はオーバリーンに代わって説教をすることができたが、その後も、壁に頭をぶつけて喚く、2階の窓から飛び降りて手首を骨折する、灰をかぶって袋の中に入る、牧師の妻から借りたハサミで自殺を図る、などの奇行が絶えず、最後には2人の監視人をつけるもこれも役に立たず、オーバリーンはついに二十日でレンツの世話を断念し、ストラスプールの知人に彼を預ける。これら一連の出来事は地元で「レンツ事件」と呼ばれたが、オーバリーンの書いた手記は後年、ドイツ人作家ビューヒナーの手で短編小説の名作『レンツ』（1835/36）に生まれ変わり、ドイツ文学史の1ページを飾ることになる。

18) Gersch, Hubert (herausgegeben von): *Georg Büchner. Lenz. Studienausgabe mit Quellen und Nachwort*. Stuttgart: Philipp Reclam 1998, S.35.

6

オーバリーは、シュタインタールでの仕事ぶりが過激すぎて、時々村民と衝突することがあり、また前任者のシュトゥーバーから注意を受けるということもあったが、神への絶対的信頼と教区に対する犠牲の精神から出た活動であったために、彼はすぐに人々の理解と尊敬を得ることになる。1774年、就任7年目にして、彼の名前がドイツの新聞に掲載される。ジョン・F・カーツは次のように述べている。

オベリン（オーバリー＝筆者）が着任するまでは、バン・ド・ラ・ロッシュと言えば、アルザス地方では憐れみと侮蔑の対象だった。しかし、オベリンが世を去るまでに、その業績はフランス、ドイツだけでなく全ヨーロッパに、またイギリス、アメリカにも知られるようになっていた。晩年には多くの訪問者が遠方から訪れ、村人たちの生活を観察し、そこで見た社会の状況を賞賛の言葉と共に報告している¹⁹⁾。

1874年、ドイツ、ポツダムのバーベルスベルクに、身体障害児を世話する女性たちの家「オーバリー・ハウス」が出来る。しかしこれよりも早く、1833年にアメリカ、オハイオ州に「オーバリー・カレッジ」が設立され、これは後に「オーバリー・ユニヴァーシティ」になる。戦前にこの大学で学んだ日本人、清水安三は長らく中国で子供の教育に携った後、1946年、東京都町田市に「桜美林学園」を創立する。

ヨーハン・フリードリヒ・オーバリーは、1826年6月1日、ヴァルダースバハで85年9か月の生涯を閉じ、川下の村フデーの教会墓地に葬られた。金属製の

19) カーツ、146ページ。

墓標には、すでに生前に使われた愛称「パパ・オーバリーン」の文字が打ち抜かれている。